



国立国会図書館デジタルコレクションで「糟屋郡須恵村」の検索を続けます。

『軍事警察雑誌』14巻12号（1920年〔大正9年〕12月10日発行）がヒットしました。軍事警察とは軍隊の中の警察、つまり憲兵（英語ではミリタリーポリス、略してMP）を意味しています。

記事は「尼港殉難憲兵遺族贈与金（第四回）」と題するもので、総額194円29銭の募金が集まったので、14勇士の

### 国会図書館所蔵資料の閲覧 (11)

町文化財専門委員  
石瀧 豊美

各遺族に平等に分割して贈与した、という報告です。遺族は全国各地に散らばっていますが、福岡県に2人いて、その内1人が須恵村の人でした。「尼港事件」として知られているものですが、私も詳細は知らず、まして現在の須恵町出身の軍人が犠牲になったことは初めて知ったことでした。

ウィキペディアの「尼港事件」の冒頭部分を引いておきます。（注記や外国語表記は外しました）

「尼港事件（にこうじけん）」は、ロシア内戦中の1920年（大正9年）3月から5月にかけてアムール川の河口にある日本人統治状態にあったニコラエフスク（尼港、現在のニコラエフスク・ナ・アムール）で発生した、赤軍パルチザンによる大規模な住民虐殺事件。尼港虐殺事件やニコラエフスク事件ともいう。

1914年（大正3年）に第一次世界大戦が勃発し、1918年（大正7年）のベルサイユ条約によって終結します。戦争の最中、1917年（大正6年）にロシア帝国で革命が起きました。レーニンに率いられたロシア革命です。ロシア国内は共産主義者側の赤軍とそれに反対する白軍との内戦（1918年〜1920年）に陥りました。

連合国側に立った日本は他国と協調してシベリア出兵を行います。これはロシア革命への干渉と評価されることとなります。このような背景のもと、日本が統治するニコラ

エフスクに、赤軍のパルチザン（非正規軍）が攻め込んで住民を虐殺したというのが「尼港事件」です。ウィキペディアは住民6000人以上が殺され、日本人（日本人居留民、日本領事一家、駐留日本軍守備隊）の犠牲者は731人としています。

また、ウィキペディアによると、「日本軍のニコラエフスク駐留は、1918年9月海軍陸戦隊の上陸に始まりました。同月のうちに陸戦隊は、陸軍第12師団の一部と交代し、1919年5月第14師団の部隊が交代した。また海軍は、航行可能な夏期にはニコラエフスクを根拠に沿岸警備を行っていたため、無線電通信を常駐させていた。」

としています。第12師団は小倉、第14師団は宇都宮の部隊です。一個師団には四個連隊が所属し、第12師団は小倉歩兵第14連隊、同第47連隊、福岡歩兵第24連隊、久留米歩兵第48連隊から成っていました。糟屋郡出身の兵士は第24連隊

に動員されます。ただ、「大正七八年蒲潮派遣軍 第十二師団忠勇美譚」（1920年）によると、第12師団は第47連隊・第72連隊・第14連隊・第24連隊で構成されています。第72連隊は大分駐屯の部隊です。連隊は三個大隊から成りますが、第72連隊はシベリア出兵で第1大隊が全滅したと書かれています（ウィキペディア）。これも「第十二師団忠勇美譚」では全滅したのは第3大隊（田中大隊）で戦死者162人、他に戦死者は、森山小隊が58人、香田小隊が45人の計265人。また西川砲兵中隊が35人で、総計300人が戦死しています。「生存者は僅かに歩兵重傷者五名」と第12師団長が書き残しています。

この時のことが次のように要約されています。大7は大正7年、Dは師団の略。「大7、8、8から同8、7、9の間連隊は臨時編成第12Dに属し西比利亜に出兵。露西亜革命後の東洋平和の恢復とチエコ義勇軍5万の救援を目的とし

浦塩（ウラジオストック）からブラゴエチエンスクに亘り討伐、鉄道警備に当る。」「（『偕行』449号）。このようにシベリア出兵は福岡出身の兵士たちが大きく関わっていました。

「尼港事件」に戻ると、尼港戦死者14人は、憲兵少尉1人、憲兵特務曹長2人、憲兵曹長1人、憲兵伍長10人であり、その中の1人が須恵村出身のS憲兵伍長です（本稿では匿名にしました。それぞれ死後一階級を進められているようです。

『軍事警察雑誌』掲載の「西比利亜憲兵史 尼港憲兵ノ最後」によると、尼港に駐在していたのは沿黒龍憲兵隊尼港憲兵分隊です。沿黒龍は黒龍江（ロシア名、アムール川）に沿った地域の意味でしょう。黒龍江は結氷していたものの、パルチザンの活発化で交通が途絶し、分隊長飯島憲兵中尉は現地に赴任しないまま事件が起きたということ

です。1920年1月27日以来、尼港は敵軍に包囲され、2月6日には無線電信所が破壊さ

れ、尼港派遣隊と外部との無線通信も途絶えることになりました。11日に攻撃を開始し、両軍激戦の中、憲兵分隊は救援を得られないまま、15日までに全員が戦死したのでした。報告書は「真に我武士道ノ花」と言うべきである、としています。

『官報』2368号によると、1920年（大正9年）5月12日、S憲兵伍長ら10人に「大正四年乃至九年戦役ノ功ニ依リ功七級金鵄勲章並二年金百円及勲七等青色桐葉章ヲ授ケ賜フ」の辞令が出ました。

『官報』2381号にも陸軍省が発表した「戦地其他死亡者」が掲載されていて、S憲兵伍長は「三月十二日沿海州ニコライエフスクニ於テ戦死」とされています。ただ「福島県糟屋郡須恵村」と県名に誤記があるのが残念です。この誤記は他の本にまで影響を及ぼしています。後に、『官報』2384号が福島県は福岡県の誤植として訂正記事を載せています。

『官報』2421号にさらに続報があり、S憲兵伍長の功により、遺族には1200円が贈られました。

なお同伍長の没後10年に至り、『軍事警察雑誌』24巻4号（1930年〔昭和5年〕4月10日発行）に、久留米憲兵隊長難波大佐が墓参をしたことが記されています。「」内は付記。

久留米憲兵隊長難波大佐は一月二十三日来、隊下各分隊、分遣隊初度巡視の途に就かれ、其の最終日二月八日属員一名及福岡憲兵分隊長河本大尉を随へ、新原分駐所の巡視を施行せらるる（新原に憲兵の分駐所があったことがわかります）。巡視終了後午後四時旧部下にして、曾て尼港事件の際、壮烈なる最期を遂げた故陸軍憲兵伍長勲八等功七級S氏の墓に参拝せられる事となり、私（下土と匿名を称しています）も之れに随行するの栄に浴した。

墓は分駐所を距る約二十町、須恵村の北方小丘松林共同墓

地中にあり。途中隊長はS氏の檀那寺に香華料一封を献ぜられ、故人の霊の供養を依託せられ、当時同寺住職他行不在の為め同村区長西郷氏の案内にて墓前に到り、香を捧げ一同参詣したるが、隊長は特に懐旧の情に堪へざるもの如く、墓碑に正面して静かに口を開かれた。

#### 要旨

大正七年八月西伯利の風雲急を告げ、第十二師団に動員を令せらるるや、難波は第十二師団憲兵長として部下二十五名を率い、遠く西伯利に出征した。当時の西伯利出征は連合国との共同出兵にして、我軍の一挙手一投足は直に列国に反響し、国軍の声望威信を終始し、延いて国際関係等惹起する虞れがあるため、長は兎も角、選ばれた憲兵は人格手腕語学等を考慮したる、実に粒選りの精兵であつた事は勿論で、君は体軀矮小なりしも胆力あり学識あり、而して軍務に熱心、精励努力、実

他兵の模範にして、特に英語

には特有の技能を有して居たのであるが、大正七年十二月某国将校が日本人に対し傷害を加へたる事件の際は、通事（通訳のこと）として憲兵長の職務遂行を容易ならしめた事等は難波が忘れ得ざる処である。其の間君は過激派残党の搜索、独逸諜報機関の排防、某国の排日的行動調査等に熱心従事し居たるが、大正八年四月難波が「ハバロフスク」を引揚げ浦塩派遣軍憲兵隊司令部に転ずる時に、特に優秀なる者三名を同地に残す事となり、君と伊藤と四郎、須藤静夫を残留せしめ、出発したのであつたが、其際君が難波を「ハバロフスク」停車場に見送つて呉れた。

其後君は尼港に行き、不幸にして「パルチザン」の襲撃に遭遇し奮戦苦闘の末、此の激戦場に於ける我武士道の花として壮烈なる戦死を遂げられたのである。（下略）

隊長の思い出話はなお続き、居合わせた人たちの涙を誘つたと云います。